



鳴けないカナリアはただの  
塵



月藤ユナ

"どいつもこいつも押し付けがましいんだよ"

目の前に広がっているのは、森。

月明かりでさえも遮断するうっそうと茂った森を駆ける少年。

口を開いてもこぼれるのはひゅうひゅうと掠れた息だけだった。嗚咽でさえ落ちてはこない。腕には風穴が空き雨に濡れても冷えることなくじくじくと熱を持っている。血にまみれた右腕を庇うようにして歩く。痛みはもうすでに感じてはいなかった。痛覚が麻痺したように、もうその右腕からは何も感じない。それがいちばんまずいことだと、考える余裕は彼にはない。ただ何も感じないくらいが今の彼には都合がいい。痛みは人と感覚と勘を鈍らせる。一瞬の隙が命取りとなるこの状況では、身体の危機を知らせる痛覚など邪魔でしかない。それよりも今は撃たれたのが右腕であることに感謝した。誰に、だなんて愚問をするやつはここにはいない。漠然とそう思っただけだ。足を撃たれたらどうしようもない。戦うことも逃げることもできなくなってしまう。その分腕でよかった。右が潰れても人間にはもうひとつ腕がある。幸いにも彼は左の方が使い慣れていた。銃弾を放った男は多分右利きで、無意識に右を狙ったんだろう。だが、今はそんな推測などどうだっていい。欲しいのは応戦するための銃弾と、食べ物。贅沢をいうのなら清潔な水とあたたかな寝床だろうか。

そう考えたところで意外と自分に余裕があることに自覚する。駆けていた足を止めてゆっくりと瞼を開ける。景色は目を閉じて走り出す前とは一切変わらない。ぐるぐると同じところを回っていたのだといわれても納得してしまうだろう。ただ耳障りな喧騒だけが消えている。ぎゃあぎゃああと喚く役人に、爆ぜる拳銃。狂ったように乱射されるのにはさすがに驚いた。流れ弾で味方が何人死んだのだろうかと考えると、少しだけ愉快になった。森の奥深くには風さえも届かないのか木々も黙りこくっている。闇に慣れた瞳が捉えたのは、隙間から零れている月明かりだった。

どのくらい走ったのかなんてわからなかった。

ここがどこなのかもわからない。

自分、という存在でさえ確かではない。

闇だと信じた現実には、目を凝らせば光があったことに初めて気がついた。

熱が冷めてひんやりと雨が身体を濡らす。息を吐いた。生きている。片腕は使い物にならないし、身体中疲弊しきっている。足は奇跡的に動かすのには支障はないが泥と血でまみれている。髪は自分の血液と返り血で赤みが掛かっているだろう。雨が流してくれればいいけど。左手を握り締めたり開いたりして動きを確かめる。大丈夫。

———まだ、生きてる。

"俺の分まで、生きてくれよな"

"あとは、よろしく頼みましたよ、xx"

まともに動かせる左腕で右肩を掴んだ。最期に"あの人"が俺に触ったところ。無理やり背負わされた命。眼下にあるのは銀光していた拳銃。血液で赤くくすんでいる。

(上等だ、あの野郎。)

歯を軋ませる。

(その命、背負ってやらあ。)

ここまで生きた。

だったらしぶとく生き残ってやるよ。

少年は小さく晒う。

血にまみれた悪魔の如く、修羅や羅刹の如く、残忍で艶やかな笑みを浮かべる。

どうしたって生きるという道から外れることはできないのだから。彼らの命を背負ったときから、俺に自ら死を選ぶという選択肢は消え去った。ならばやるべきことはひとつだろう。

愛用の拳銃を拾う。リボルバーを回す。カチャリと不吉な、死の音が鼓膜を揺らす。真っ赤な指をかけて、ありったけの力を込めて引き金を引く。

闇を劈く音。

少年が生き延びる覚悟を決めた、合図。